

第6講 雑誌登録実習2

p.75-104

このコマで理解して欲しいこと

1. 総合目録データベースにヒットしなかった場合、書誌レコードの作成が必要であること
2. 参照ファイルのレコードや総合目録データベースの類似書誌レコードを利用することで効率的にレコード作成ができること
3. 資料現物と『目録情報の基準』に照らしての編集が必要であること
4. 基本的な記述文法
5. 著者名典拠レコードとのリンク形成の方法
6. 初号を記述の根拠にした場合と、初号以外の号を元にした場合の違い

このコマの進め方

1. テキストによる説明
2. テキストの例題を全員で行う
3. 登録課題集を使った実習

<時間配分の目安>

平成24年度カリキュラムから、書誌登録実習の後、SL教材の復習として所蔵登録の解説も行えるように各コマ5分増やした。

課題集は和雑誌1-3・洋雑誌4-6を、各項の後に分けて行ってもよい。

	275分
書誌流用入力 和雑誌初号あり	65分
書誌流用入力 和雑誌初号なし	45分
書誌流用入力 洋雑誌初号あり	40分
書誌流用入力 洋雑誌初号なし	40分
書誌新規入力 和雑誌初号あり	85分

説明のポイント

<p>p.75</p>	<p>1.書誌流用入力の手順</p> <p>最初に流用入力全体の流れを説明する。書誌レコードの入力には、流用入力と新規入力があることを確認し(p.51)、この時間では、総合目録データベースに求めるレコードがなく、参照ファイルに一致レコードがある場合を想定して、書誌流用入力を行うことを冒頭に説明する。</p> <p>「登録作業の直前」に検索を行うことは当然だが、同時進行で重複書誌を作成しているということもありうる。書誌を作成し、所蔵登録まで終了した後に、再度書誌検索を行い、重複書誌となっていないかどうかを確認することを習慣づけるよう説明する。</p>
<p>p.76-77</p>	<p>2.書誌流用入力の概念</p> <p>流用入力とはどういうことなのか、その概念を手短に説明する。</p> <p>本来、参照ファイルとは、総合目録データベースとは別のルールに基づいて作成された書誌データを、機械的に総合目録データベースのレコードに似せた形に変換して見せているものである。そのため、流用入力時には必ず、総合目録データベースのルールに基づいて、書誌の編集をしなければならない(参照ファイルからの流用入力時の注意点は、p.88-89, p.97-99にあるが、簡単に触れる程度でよい)。</p> <p>また、データ内容そのものも、常に正しいとは限らず、全てのデータについて手許の資料(情報源)で確認しながら、各データの取捨選択をきめることが重要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➡ SL教材の「目録情報の基準. 雑誌編」でも、記述文法、雑誌書誌レコードのフィールドの説明があるが、この講で初めて実際の入力を行うので、簡単に復習して次に進める。 <p>記述文法: 付録2 p.150-154, フィールドの説明: p.15または付録1 p.145-149</p> <p>補助教材の下敷き(クイックレファレンス)にp.77と同じ記述文法(抜粋)があるので、適宜講習会中のツールとして紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➡ 書誌レコードは共有レコード(p.13)であり、書誌登録はデータベースの品質維持に最も重要であることも強調する。 ➡ 『コーディングマニュアル』を参照するよう講習会用ホームページ等の場所を紹介しておくこともよい。(p.11-12) ➡ コードについては、下敷き(クイックレファレンス)または、テキスト付録4(p.157)にコード表(抜粋)があるので、随時参照しやすいようにしておくことを勧める。また、豆知識の面に西暦換算や記号やスペースの使い方が載っていることを案内するとよい。 <p>【解説】 IDENT(アクセス先に関する事項)は電子ジャーナルにのみ使用。電子ジャーナルについてはテキスト付録 14 にある。『コーディングマニュアル』は和洋とも 6.0.4 および 17.0.1 参照。</p>

p.78-83

3.書誌流用入力(和雑誌・初号あり)

テキストの例題5を受講者一斉に行う。

1. 書誌検索を行う。
2. 検索の結果、参照ファイルにヒットした場合には、必ず他の検索キーでも検索してみ、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを再度確認する。
 → 初号主義について(p.22), 簡単に復習する。
3. 『目録情報の基準』に従って、所蔵する資料に表示されている事項にあわせて流用元の書誌レコードを編集する。
4. 入力に時間がかかる受講者がいる場合は、全体のペースをそろえるよう配慮する。ここで遅れてしまうと、後のコマ全てについてこられない受講者ができる恐れがある。
5. 著者名リンクを形成する。講師が最初にやってみせてもよい。
6. 著者名リンク形成のための操作をしたが、求める典拠レコードがヒットしなかった場合の再検索の方法(検索キーを変更して再検索)について説明する。このコマで説明する時間がなければ、後のコマに申し伝える。
7. 編集集中の書誌レコードのALフィールドにリンク先の著者名典拠レコードIDが記入されたことを確認する。リンク形成をすることによって著者名典拠からの検索もできるようになることを伝える。
8. 書誌レコードを登録する前に改めてレコードの記述を確認する。
9. 書誌レコードがどのタイミングで登録されるのかを伝える。
10. 後で確認するために、書誌レコードのレコードIDを控えておくように伝える(登録終了後、検索をしてみると、重複書誌が受講者数分できていることを見せることもよい。) 重複書誌を防ぐため、日常的に登録直前/直後の検索を習慣づける。
11. 雑誌書誌レコードを作成した場合の国立情報学研究所への報告作業について説明する(図書の書誌調整方法はホームページの連絡ツールで行えるように変わったが、雑誌の場合は従来どおり書誌レコードのハードコピーと情報源のコピーを、FAXまたは郵送かメール(情報源は添付)で学術コンテンツ課宛に送る)。付録15「雑誌書誌に関する報告・情報源の送付について」を参照する。
 → p.23雑誌書誌レコード作成・修正の報告(事前学習)を復習

【解説】

- p.78 ISSN は1号の情報源ではなく、2号の表紙にある。『コーディングマニュアル』6.1.15DによればISSNの[データ要素の情報源]は「どこからでもよい」となっており、流用元のレコードに入っているデータをいじる必要はない。
- p.81 TRD 責任表示の役割表示補記について、
 「責任表示は、本タイトルと同一の情報源上に表示された、逐次刊行物の知的もしくは芸術的内容の創造、具現化に責任を有するか、寄与している団体及びその役割に関する表示である。」(『コーディングマニュアル』6.2.1F5)。例題5では表紙の情報源上に役割表示がないので補記する。補記はカタログの判断で[編]でも[編集]でもよい。補記の[]の前後にはスペースが必要。例題6では奥付に「編集」とあるので、[編集]と補記している。
- p.81 VT の一覧表は補助教材下敷き(クイックレファレンス)および付録10「その他のタイトル」にあり、補講2で解説する予定。また、ここで欧文タイトルのヨミは不要であること、大文字使用法はその言語の慣習によることを付け加えるとよい。

<p>p.84-87</p>	<p>4.書誌流用入力(和雑誌・初号なし)</p> <p>例題6を受講者一斉に行う。要領は例題5と同じ</p> <p>【解説】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● この例題はISSNではヒットしない。 ● p.86をデモンストレーションする際、流用元のVLYR を削除する前に、NOTEを記述するような手順を指示すると、コピー＆ペーストできるので受講者の実習もスムーズに運ぶ。NOTEなど入力が多いところでは、速度の差が大きいので一斉に進めるための配慮も必要。 ● 注記の記入例について、付録12(p.169-170)を紹介することもよい。なお、p.86囲みの「何号に基づいて記述したかを注記(NOTEフィールド)に明記する」ことは、必須事項である。 ● YEAR1の桁数不足(198や19-)、ハイフンが全角(198-)や、ISSNの誤入力で所蔵登録に移行する際にエラーとなる受講者がいるので、コードブロックについても注意が必要。
<p>p.88-89</p>	<p>5. 和雑誌流用入力時の主な注意事項</p> <p>和洋それぞれの例題の後に「流用入力作業時の主な注意事項」を載せているが、詳しく説明する必要はない。「参照ファイル利用時には、手元の情報源をもとに書誌内容の確認が重要」であることが理解されればよい。</p> <p>【解説】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● オンライン・システムニュースレター抜刷集 3.4.3に例示がある。抜刷集はトップページから下記のように辿って参照できる。 ドキュメント>ニュースレター(最下段)>オンライン・システムニュースレター抜刷集目次
<p>p.90-92</p>	<p>6.書誌流用入力(洋雑誌・初号あり)</p> <p>例題7を受講者一斉に行う。要領は例題5、例題6と同じ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● この例題から洋雑誌になるので、検索の際にWebUIPの参照ファイルのプルダウンメニューから、「洋雑誌」を選択することを忘れないよう注意する。 <p>【解説】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● この例題はタイトルで検索すると、他のSERIALのレコードがヒットするので、ISSNを追加する。 ● 和資料と洋資料では、準拠する目録規則が違い、『コーディングマニュアル』もそれぞれの章立てになっている点を確認することもよい。また、フィールドの最後にはピリオドを付けない等の説明や、下敷き(豆知識)の「ピリオドの記述方法」「スペースの記述方法」を補足すると、洋雑誌に不慣れな受講者が安心できる。 ● p.92 VLYRの「Jan.」はAACR2の付録B参照。テキストの画面例には写っていないが、VTフィールドのKTとABについて、受講者の多くが疑問に思う点なので、簡単に補足して進める。 KT→「ISSNネットワークに登録されているタイトルなので、そのまま残します。」 AB→「キータイトルを一定の省略法によって略記したタイトルなので、これもそのまま残します。」

p.93-96	<p>7. 雑誌流用入力(洋雑誌・初号なし)</p> <p>例題8を受講者一斉に行う。要領は例題5, 例題6, 例題7と同じ。</p> <p>この例題では終号がある場合, タイトル変遷がある場合の扱いについてもふれる。</p> <p>【解説】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 例題6と同様に, p.95をデモンストレーションする際, 流用元のVLYRを削除する前に, NOTEを記述するような手順の指示をすると, 実習がスムーズに運ぶ。 ● p.95 VLYRは流用元のUSMARCSとかなり書き方が異なるので注意する。記述文法を参照することもよい。 ● p.95の2つ目のNOTEは流用元のUSMARCSをそのまま転記しているが, 例題6のようにNACSISのVLYR記述文法の形で記述してもよい。 ● p.96の変遷注記用データシートについては, 第7講7で説明するのでここでは触れる程度とする。
p.97-99	<p>8. 洋雑誌流用入力時の主な注意事項</p> <p>5.和雑誌流用入力時の主な注意事項と同じ。</p>

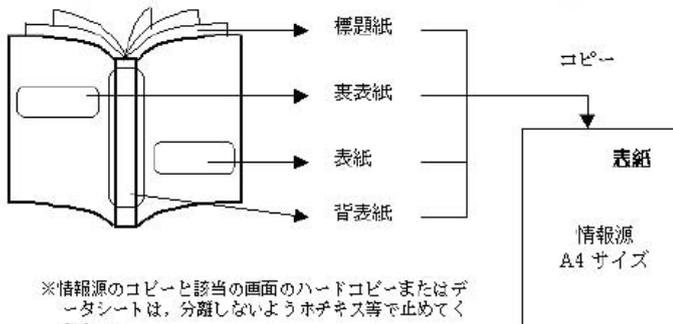
- 付録15(p.174)雑誌書誌に関する報告・情報源の送付について, 簡単に説明する。
 なお, ニュースレター31号(2010.12.28)に掲載された通り, 『コーディングマニュアル』6.0と7.0通則に雑誌書誌の新規作成・修正の際の報告, 情報源の送付について追記された。

【解説】

具体的な情報源箇所のコピーについての説明は, 『NACSIS-CAT全国雑誌所蔵データ更新作業マニュアル』(p.7)に図解(以下抜粋)がある。

***1 情報源**

情報源とは、書誌データ記述の根拠となった対象資料上の特定箇所を意味しています。
 書誌の新規作成・修正時、または変遷報告時には、必ず根拠となった情報源コピーを添付してください。
 特に、表紙・標題紙・奥付・裏表紙は重要な情報源です。必ずコピーを添付してください(該当箇所が無い場合は結構です)。
 また、情報源コピーは原則としてA4サイズをお願いします。A4サイズ以外の場合は、適宜、拡大・縮小してください。



※情報源のコピーと該当の画面のハードコピーまたはデータシートは、分離しないようホチキス等で止めてください。

1. 書誌の新規作成時
 所蔵最古号の表紙・標題紙・奥付・裏表紙等、記述の根拠となった箇所の情報源コピーが必要となります。
2. 書誌修正時
 書誌修正の根拠となった号の表紙・標題紙・奥付・裏表紙等、記述の根拠となった箇所の情報源コピーが必要となります。
3. タイトル変遷関係報告時
 変遷関係を証拠立てる情報源、および変遷直前・直後の双方の号の、表紙・標題紙・奥付・裏表紙等、記述の根拠となった箇所の情報源コピーが必要となります。

登録課題集 課題1-6(p.8-19)使用

- 講習会では一斉に同じ課題を実習するため、先に他の受講者が登録したレコードがヒットしてしまうことがある。練習のために、総合目録データベース(SERIAL)になかったと仮定し、参照ファイルから流用入力すること(ファイル指定して検索)をあらかじめ伝える。
- 課題集の実習についても、後で確認するために、作成した書誌レコードIDを控えておくように指示する。
- 平成24年度テキスト改訂で、各課題に所蔵の範囲を明示した。所蔵登録についてSL教材で学習したことをここで復習・確認する。
- 所蔵登録までした後に間違いに気づいて、自分が作成した書誌を修正したいという受講者がいた場合は、他の人が作成したデータをいじらないように、必ず、あらかじめ控えた書誌レコードIDで書誌検索をするよう注意する。
- 稀に著者名典拠レコードを作成してしまう人がいるが、著者名典拠の双子レコードを作成されてしまうと、後からその課題を行う受講者に混乱をきたすことになる。この講の課題にはすべて著者名典拠レコードが用意されている旨をあらかじめ伝えておくといよい。

【個々の課題についての注意点】

課題1と課題2の出版地について

出版地は市・町・村を記入するが、「新潟県南魚沼郡大和町」は『コーディングマニュアル』6.2.4F2.1に従い、識別上都道府県を()で付記する。

「京都市左京区聖護院河原町」は市にあたる「京都」

課題4の合併号の場合の年月次間の記号について

『コーディングマニュアル』7.2.3F2.7参照(NACSIS独自規定で、洋雑誌の場合はスラッシュを使用する)。

課題4の出版地州名の略語N.J.は、AACR2付録Bによる。(課題20のN.Y.も同様)

課題6は著者名典拠が再検索しないとヒットしない例。

著者名リンク形成のための操作で、求める典拠レコードがヒットしなかった場合の再検索の方法(検索語を変更して再検索)について必ず説明する。この課題だけ実習前に一緒に行いながら説明してもよいし、実習のあとに補足説明として行ってもよい。

課題4-課題6の洋雑誌VLYRの月名の略語はAACR2付録Bによる。

説明のポイント

<p>p.100</p>	<p>9.書誌新規入力の手順</p> <p>実際の業務では新規入力を行うことは少ないかもしれないが、新規入力をやってみることで、流用入力の便利さがわかる。</p> <p>データの入力の際に記述文法を意識することが重要である。</p> <p>下敷き(クイックレファレンス)や、テキストp.15, p.77または付録1(p.145)等を使って雑誌書誌レコードを構成するフィールドを確認し、必須フィールド、リンク形成についてなどの要点をおさえておくこともよい。</p>
<p>p.101-104</p>	<p>10.書誌新規入力(和雑誌・初号あり)</p> <p>テキストの例題9を受講者一斉に行う。</p> <p>入力する前に情報源をよく見て、レコードの形を想定することを促す。</p> <p>検索の結果、求めるレコードがヒットしなかった場合には、必ず他の検索キーでも検索してみて、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを強調する。</p> <p>記述文法を確認しながら、データを入力する。</p> <p>TLL, TXTL, TR, PUBが必須フィールドであることを説明する。</p> <p>付録2データ記述文法(抜粋)に沿って、記述文法を説明する。記述文法の見方がわかりにくいと感じる受講者が例年多いため、TR等を例にとりて具体的に説明することが望ましい。ただし、流用入力のコマで詳細な説明が既にされていれば、ここで繰り返さなくてもよい。</p> <p>下敷き(クイックレファレンス)「和雑誌の書誌レコード例」や「記述文法(抜粋)」を使って説明することもよい。</p> <p>クライアントによっては、TR, PUB等必ず記述文法でデータ要素を区切らなければならないフィールドを除き、記述文法での入力が不要なものもある(例:WebUIP)。受講者にも、業務を開始する際に自館のクライアントにて確認するように伝える。</p> <p>【解説】</p> <p>例題9のVLYRは情報源の表紙に「Vol. 1 No. 1」、奥付に「第1巻1号」と表記されている。『コーディングマニュアル』6.2.3 F3.3により、巻次の採り方が同一の、日本語と別言語(別文字)による表示がある場合、日本語表示のみを採用する。</p>

登録課題集 課題7-10(p.20-27)使用

- 登録課題集はこの時間中に行わず、自由演習の時間にまわしてもよい。
- 実習に入る前に、参照箇所を指示しておくこともよい。スキルアップには数をこなすことより、ひとつひとつ確実に行うことが大切であり、各種参考資料を確認しつつ進めていくよう促す。
テキストで記述文法(抜粋)(p.150-154)、コード表抜粋(p.157)、その他のタイトル(p.165-166)や、『目録情報の基準』11.3のヨミや分かちについて、また、ツールの年号／西暦変換などを利用。
下敷きにはこれらをコンパクトにまとめている。
- 平成24年度テキスト改訂で、各課題に所蔵の範囲を明示した。所蔵登録についてSL教材で学習したことをここで復習・確認する。
- 洋雑誌の情報源の見方や記号の習慣等、課題集からひとつ例をとってデモしてから実習に入ると、洋雑誌について不安を感じる受講者により。

【個々の課題についての注意点】

課題8を解説する時、NOTEに記述されている“Title from cover”に関連して、付録13情報源一覧(p.171-172)を紹介することもよい。本来洋雑誌なので本タイトルはタイトルページからとることになっているが、この課題の場合、表紙＝代替物から記述しているため注記が必要となる。

課題8の出版年については、判断が分かれるところで、解答例集では出版年にあたる表示がなく、表紙裏にある著作権登録年「©1994」を代用し、「c1994」と記述している。表紙裏のSubscription InformationにVolume 1 (4 issues) will appear in 1994とあることから、表紙の1994は年次でもあり出版年でもあるとみなし「1994」と記入しても可とする。